

柔道修業と人間形成に関する一考察

(武徳紀要第 17 号掲載)

平成 13 年 3 月

中島 猷 (国土舘大学)

村上 繁 (東海大学)

金 官絃 (龍仁大学)

国土舘大学武道德育研究所

柔道修業と人間形成に関する一考察

中島 獠* 村上 繁** 金 官絃***

[目 次]

要 約

I 目 的

II 柔道修業の目的

III 日本における人間形成としての文武思想

IV 柔道の理念と人間形成

V 結 論

要 約

文武思想は日本において、江戸時代より人間形成としての武士修養規範となっていたものであるが、今日といえどもこの文武兼備の人格が我が国の理想人格であることに異存のないところである。

柔術はこの文武兼備思想が唱えられた武家時代の中に成長し、日本伝来の教育方法である文武思想によって彩られている。

柔道の創始者である嘉納治五郎は新しく柔道の技術を体系づけ、思想面においては柔術の理である「柔能制剛」の理論を発展させ、「精力善用」という指導原理と社会生活の発展の目標として「自他共栄」を確立させた。

この教育理念としての文武思想も、柔道の理念としての「精力善用・自他共栄」の思想も、人間形成を主体とし、治国と世界平和に寄与するものといえる。

I. 目 的

柔道が国際スポーツとしての地位を築くことができたのは「道」としての柔道といった観念から一歩ゆずり、競技ルール化を断行した結果からであるといわれる。

一方において競技スポーツとしての柔道と共に柔道が世界の人々に取り組みられるようになったのは、柔道のもつ「精神性」にあったといえる。つまり、柔道が人間にとって、今日の社会において価値を問うならば、それは人間形成に大きな役割を果たし得ることができるからであると考えられる。

さて、日本においては文武両道の教養が必要であり、人間完成のためにこの両道の完備こそ教育の要諦であるということは、江戸時代から現在に至るまで一貫して説かれてきている。この文武両道の教養を身に付け、治国の理を学び世界平和に寄与することが柔道の理念でもあるといえる。

そこで今回は、柔道修業と人間形成に視点を当てて考察するものである。

II. 柔道修業の目的

嘉納治五郎は柔道修業の目的について、往時の柔術は技術を学ぶと同時に武士の精神を養うことを目的にしていたが、柔術そのものは技術であった。従って修業者は技

術の練習に励んで精神の修養を打ち捨てていた嫌いがあったとして、「今日の柔道は道を体得することを修業の目的として、技術はその手段として練習することになっている。技術そのものの修業の価値があるのだから修業がそれだけに止^{とどま}っても差し支えないことは勿論であるが、道を体得し、且つこれを人生万般のことに応用することの出来る修養をすることに比すればそこに雲泥の差がある⁽¹⁾」。

柔道を道として学べば、これを体得する手段として用いる技術は自然に覚えることができるようになるが、これを技術としてのみ練習するときはいつまでも道に到達し得られぬものである。「それ故に柔道の修業者は道を体得する事が本当の目的であって、技術の練習は手段であるということを忘れてはいけない⁽²⁾」と述べ、「柔道の修業が単に技術の末に流れて修養方面のことを閑脚するに至れば、世人は柔道を重んじなくなってしまう。柔道の教員も技術ばかりを教えて人間を造ることに留意しなければ、生徒からも父兄からも軽んぜられるようになって止^やむを得ない⁽³⁾」とまで言及しているのである。このことから、柔道修業において最も根本的に大切なことは、「道」を体得し、人間形成をはかることであるということが理解されるのである。

Ⅲ. 日本における人間形成としての文武思想

文と武は、中世において世襲的に分かれており、それぞれの家業において文あるいは武にいそむべきものであるとされていた。京都の公家の文に対して、関東の武家は武をもって自らの本分としていたようである。江戸時代になると、中央集権的な封建制度が確立され、武士は三民の長として実権を握り、治国平天下の道を尽くことが武士の職分であり、このため文武を修練し文武兼備することが武士に要求されるようになってくるのである。

中江藤樹は

「根本さぶらいの品は、上中下の三段あり。明德十分にあきらかに名利私欲のわづらいなく、仁義の大勇ありて、文武を兼ね備わりたるを上とす⁽⁴⁾」と述べ、五倫の道を正し、明德に明らかで、礼楽書数の文芸、射禦兵法などの武芸を兼ね備えた武士が理想の士であるとする。このように日本においては、文武両道の教養が必要であり、人間完成のために、この両道の完備が教育の要諦であるということが江戸時代から現在に至るまで一貫して説かれてきている。ところでここでいう文とは武とは、その内容において何であろうか。文と言えば四書五経を読むことを意味し、武と言えば弓馬・

剣・槍・柔などの武芸をさしているといっても異論はない。ただ武の中に武徳や兵法など軍学的研究も含めて考えた場合、これらは果たして武であるか文であるかという疑問も起きてくる。このことから文武は単に読まれるべき書物や錬磨すべき武芸によって区別できないものである。いわゆる単に四書五経は文、弓馬刀槍は武であるといっただけでは文武の本質についての説明とはならないのである。ここにおいては文武の本質を吟味しなくてはならない。

中江藤樹は

「天を経として地を緯として天下国家をよく治めて五倫の道を正しうするを文という。天命を恐れず悪虐無道のものありて文道をさまたぐるときは、或いは刑罰にて懲し、あるいは軍をおこし征伐し天下統一の治をなすを武と云う……。文は仁道の異名、武は義道の異名なり。仁と義はおなじく人生の一徳なるによって、文武もおなじく一徳にして格別なるものにあらず……⁽⁶⁾」と述べ、文の本質は仁であり五倫の道を正しくすることである。武はこの文を妨げる暴力に対して加えられる正義であって、文を全うし仁を行うために発動させるべき力であるとする。そして文武には徳と芸との本末があって、仁は文の徳であって文芸の根本となる。

礼楽書数は芸であり文徳の枝葉である。義は武の徳であって武芸の根本である。弓馬兵法などは芸であって武徳の枝葉である。まず根本の徳を学んで、枝葉の芸は次に修練し、徳と芸が兼ね備わって文武合一となることが真実の文武であるというのである。ここにおいて、儒教の思想をもって文武を仁義と同一に見て論ずれば、文の本質は仁であり、文をもって人をあわれみ人をなずけるものである。これに対して武はこの文を妨げる暴力に対して加えられ、敵を打ち、乱を沈めるるもので、これを義であるとする。文は孝悌忠信の道を正しく行い、人を愛し互いに親和する徳であり、武は人倫を正しく守り、人を戒め互いに親和する徳である。文武思想の根底にあるものは徳を明らかにし、この徳を学ぶことによって「人間完成」を目ざすことにある。そして文武の徳をもって人を治め、天下国家を治め平和な社会を創ることにあるといえよう。

IV. 柔道の理念と人間形成

柔道は日本の封建時代に発達した柔術の修業から生み出されたものであり、今日の柔道の目的は、単に肉体的な訓練にとどまらず、柔道の根本原理の体得とその原理を

社会生活全般のことに応用することである。

その根本原理とは

「何事をするにも、その目的を達するために精神の力と身体の力とを最も有効に働かすということである。心身の力を最も有効に使用するということは、柔道の攻撃防禦のあらゆる場合を一貫した原理であり、また教えであるというてよい。この心身の力を最も有効に使用するということは、簡単に言えば精力の最善活用というてよい⁽⁶⁾」。これは柔道修業上最も大切な教えであり、また人生各般の目的に到達するためにも必要な教えであるという。そして精力最善活用について「善を為すことを目的として、精神身体の力を最も効力あるように使用するという意味である。人間の為すことは何時でも善でなければならぬから、善を目的としてというのである。そうしてその目的を遂げる為に、精神と身体の力を寸毫^{すんごう}の無駄なく、最も有効に働かすということとは、何時でも人間の道でなければならぬ。物の進歩を図るにも、向上するにも、発展するにも、目的達成するにも、この指導原理に依るより外に仕方はないのである⁽⁷⁾」と述べ、精力最善活用とは人間の進歩や、社会の発達や、目的達成における大原則であるというのである。この原則を活用する人間は社会生活を営んではじめて人間としての価値を発揮するものであるから、誰でも社会生活から離れることはできない。そこでこの原理を社会生活に活用するのは、その社会が一致協力することである。それぞれが自己の利のみを図って他人を顧みないようでなく、互いに助け合い譲り合うことが大切である。精力善用を社会生活において実践していくには、自他共栄することがその基礎とならなければならない。

「人が社会生活をしている以上は一人が己の栄を得んと努力する場合、他の人の同様の努力と衝突することがある。そういう場合に、双方が自分の考え通りに行動すれば、双方の力が協同することが出来ず、互いに破壊し合うことになる。その結果として、双方の力の和が用を為さず、破壊した後に残った部分だけが用を為すことになる。それ故に、衝突を避けて、協調を求めなければならぬ。この協調は自他共栄主義でなければ達せられぬのである⁽⁸⁾」。この自他共栄は、社会の存続発展の根本原則であり、道徳の根本原則にもなる。つまり人と人との間には煩雑な問題があり、これを調和し調節していくには、礼儀とか信義とかいった徳目があって、それらの力によって人と人との関係を円満にしていくことになるが、礼儀や信義といった徳目の後に一つの原理が存在しており、それが自他共栄であるというのである。この自他共栄は、個人ばかりでなく国家の力を充実させ、社会生活を幸福に健全に存在発展させることができる。これを国際関係に応用すれば国際間の平和に役立ち、人類の進歩に貢献でき、思想問題に応用すれば、混乱する諸々の思想を適性に指導することもできる。この自他

共栄主義を実行する個人は、社会の親愛を受け、国家がこれを実行すれば、各国の信頼を得ることができるのである。

柔道を修業するのは、単に道場内のもののみとせず、広く人生万般に応用して、個人・国家の発展から、国際間の平和と人類の福祉増進に役立たせていくことである。

このことから、柔道の理念である「精力善用・自他共栄」は柔道の修業による人間形成を通して治国の理を学び、世界平和に寄与することにあるといえる。

V. 結 論

日本における江戸時代より現在までの教育理念としての文武思想とは、根もない草木に実を結ぶことがないように、礼楽書数がよくできたとしても根本の徳がなければ文道の用に立たず、射禦兵法にいくら長けていても武徳が備わっていなければ武道の役に立たないものであるから、この文武の徳を明らかにすることであった。この徳とは仁・義をもって本とし、この仁・義の徳を学び文武兼備することが教育の理想とされていた。つまり武芸の修練にとどまらず仁・義の徳を学ぶといった精神修練こそが、人間形成に役立つものとするのである。

一方、明治時代における西欧化という社会背景の中で「文武両道」の必要性を痛感した嘉納治五郎は、自国の事物を愛し、正義を重んじ、互いに礼儀を守り親しむという日本民族の伝統と国民精神を保持するために必要な武的要素を温存して、危険性のある武術的要素を取り除いて、体育として、あるいは人間形成のための教育手段として柔道を創設したと考える。そして新しく柔道の技術を体系づけ、思想面においても柔術における柔の理「柔能制剛」の理論を発展させ、「精力善用・自他共栄」という指導原理を確立させたのである。

日本における教育理念としての文武思想も、柔道の理念である「精力善用・自他共栄」の思想も、人間形成を通して治国と世界平和に寄与することにあるといえるのである。

以 上

本研究の一部は2000 Seoul International Judo Scientific Congress・2000年11月30日 Olympic Parktel, Seoul, Korea で発表した。

参考文献

- ¹⁾ 嘉納治五郎論説集（其ノ三）「如何にすれば今日の柔道を国民の柔道と為し得るか」P-2, 1932.
- ²⁾ 同 上 P-3, 1932.
- ³⁾ 同 上 P-3, 1932.
- ⁴⁾ 日本思想大系－29「中江藤樹」岩波書店 P-65, 1974.
- ⁵⁾ 同 上 P-57, 1932.
- ⁶⁾ 嘉納治五郎論説集（其ノ二）「精力の最善活用」P-8, 1922.
- ⁷⁾ 嘉納治五郎論説集（其ノ三）「国民の指導原理として精力善用・自他共栄を論ず」P-2, 1933.
- ⁸⁾ 嘉納治五郎論説集（其ノ二）「自他共栄に関する種々の質問に就いて」P-2, 1925.

A Consideration of Judo Training and Human Formation

Takeshi NAKAJIMA* Shigeru MURAKAMI** Kwan-Hyun KIM***

(*Kokushikan University **Tokai University ***Yong-in University)

I. Objective

It is said that the reason why *judo* became an *international sport* is that it has been valued from the competitive point of view.

On the other hand, people from all over the world have been attracted to the spirit of judo. If we examine the role of judo during this period, it would be the contribution for the development of human beings.

As Japanese, we have been required to be a good warrior and good scholar at the same time. This has been the most important factor of education since *Edo period* until this modern age.

The idea of judo is to be a good warrior and good scholar, to govern the country, to contribute the *peace of the world*.

This is the study to focus on the idea of being a good warrior and a good scholar through judo training to be a perfect human being.

II. The nature of a good warrior and a good scholar

Bun-Bu is composed of morality and art. Jin is morality of Bun, which is the basis of art. Being educated is the art, which is a minor part of Bun. Gi is morality of Bu, which is the basis of marital art. Fighting strategy is the art, which is a minor part of Bu.

Learning the basis of morality and brushing up your artistic talent is the real approach towards Bun-Bu, because you are supposed to have both morality and artistic talent.

The conclusion of the nature of Bun-Bu is that Bun-Bu is the way to govern the world. You love the people with Bun and pity the things with Bun-

toku. You can tell if it is good or bad with Bu and correct the people with Bu-toku. Without this Bun-Bu, you can never behave yourself and other people.

Key word : Judo, International sport, Edo period, Peace of world

A Consideration of Judo Training and Human Formation

(武徳紀要第 17 号掲載)

平成 13 年 3 月

Takeshi NAKAJIMA (Kokushikan University)

Shigeru MURAKAMI (Tokai University)

Kwan-Hyum KIM (Yong-in University)

国士舘大学武道德育研究所

The Bulletin of the Institute of Budo and Moral Education

A Consideration of Judo Training and Human Formation

Takeshi NAKAJIMA* Shigeru MURAKAMI** Kwan-Hyum KIM***

(*Kokushikan University **Tokai University ***Yong-in University)

Summary

In Japan, Bunbushiso (a thought of literature and martial arts) has been a criterion of Samurai training for a human formation since the Edo period. Even today, there are no objections to say that the characteristics of Bunbu (the mastery of both literature and martial arts) is an ideal in our country.

Jujutsu grew during the Samurai period. This is when Bunbushiso was introduced. Jujutsu was constructed by Bunbushiso; a Japanese educational method handed down many years ago.

Jigoro Kano, a founder of Judo, newly systemized the Judo techniques. He developed a theory in the area of thought called “Junoseigo”. This is the reasoning of Jujutsu. He also established a concept of “Jitakyoei (mutual prosperity)” to develop life in the society and a guiding principle called “Seiryokuzenyo (good use of energy)”. Bunbushiso is an ideal of education and “Seiryokuzenyo and Jitakyoei” are an ideal of Judo. They compose the idea of the human formation. They can contribute to rule the country and enhance a world peace.

I. Purpose

Judo established a position as a world sport by sticking to the rules of the game instead of focusing on the concept of Judo as “Dou (the way)”. On the other hand, the reason why Judo became a game in sports and became popular among the people in the world is because of its “spirituality”. In other words, Judo can be considered as a contributor to the human formation when

the value for human beings in today's society is questioned. Currently, Bunburyodo (a combination literature and martial art) in education is necessary in Japan. It has been consistently stated since the Edo period that Bunburyodo is a secret of education for completing a human being. The ideal of Judo is to master Bunburyodo, learn the way of ruling a country, and contribute to world peace. Therefore, Judo training and human formation are especially focused on in this paper.

II. Purpose of Judo Training

In older times, Jujutsu was aimed at learning technique and developing Samurai spirit. However, since the jujutsu itself was technique, there was a tendency to be worked hard on practicing techniques and neglected the spiritual development. Jigoro Kano talked about a purpose of Judo training, "Today, the Judo training is aimed at mastering Dou, and the techniques are supposed to be practiced as a step of mastering Judo. Since it is still valuable even though only techniques are mastered, there would be no objections if the training were focused on the mastery of techniques. However, there is a great difference between mastering only techniques, and applying Dou into the many aspects in life after mastering the Dou (1)." When Judo is learned as Dou, the techniques can be automatically learned since it is a step of mastering Judo. However, Dou cannot be mastered when Judo is practiced as just techniques. "Therefore, to master Dou is a true purpose for Judo students. They should keep it in their minds that training techniques is just a step of mastering Judo. (2)" Jigoro Kano also said, "People would not value Judo if Judo training neglected the cultivation aspect by emphasizing mastering techniques. It is inevitable that students and their parents would disrespect the trainers if the trainers teach only the techniques without focusing on the creation of human beings. (3)" Therefore, the most basically important thing in Judo training is to master Dou and to enhance the human formation.

III. Bunbushiso in Japan: as a human formation

Bun (mastering a literature) & Bu (a mastering martial art) were separated in the middle Ages. People were supposed to study either Bun or Bu depending on their own family business. By comparing the Bun for Koke in Kyoto to the Samurai family in the Kanto area, it seems like a Samurai family treated Bu as their text. After centralization feudalism was established in the Edo period, the Samurai held power as the leader of Sanmin (three types of civil group). The Samurai was expected to rule over the whole country as their job. As a result of living up with this high expectation, the Samurai was required to become Bunbukenbi (grasping Bun & Bu) by practicing Bunbu. Toju Nakae said, "Basically, there were three levels in Samurai; upper, middle, and lower classes. The Samurai in upper class clearly understood the morality without pursuing only self-interest such as fame and fortune. They supposed to hold a true justice, humanity, and Bunbukenbi (4)". The Samurai also obeyed Gorin (the five disciplines in Confucianism). An ideal Samurai was one who had mastered both arts and literatures. Reigakushosu (to pursue proper etiquette, music, writing, and mathematics), and martial arts such as Shagyoheicho (archery, horse riding, and fighting) are examples of areas mastered. It is necessary to have Bunbukenbi in education in Japan. The importance of Bunbukenbi has been consistently taught since the Edo period with the notion that Bunbukenbi is a secret of education for human formation. Now, what exactly are the Bun and Bu? There are no objections to saying that Bun means to read Shishogokyo (reading material written by saints in Confucianism), and Bu means a martial art such as archery, horse riding, sword fighting, throwing spears, and Judo. However, when looking at Butoku (a moral obligation in a martial art) and Heiho (the way of fighting), it is questionable whether they belong to Bu or Bun. Therefore, Bunbu cannot be distinguished by either reading materials or martial arts. Classifying Shishogokyo as Bun and Kyubatoutou (archery, a riding horse, sword fighting, and throwing spears) as Bu is not enough of an explanation of the essential quality of Bunbu. Toju Nakae said, "Bun is to rule the whole country and to obey Gorin. Bu is to unify the whole country by preventing the influence

of Bundo (the way of literature). It is used without any hesitation, punishing people, and using force. Bun is an alias of Jindo (the way of benevolence) and Bu is an alias of Gido (the way of justice). Jin and Gi are virtues of life as well as Bunbu (5)". The essential qualities of Bun are Jin and obedience to Gorin. Bu is a justice, which used violence to prevent the influence of Bun. It is also the power to exercise Jin by destroying Bun. Moreover, Bunbu holds a virtue and art. Jin is a virtue of Bun and a basic of arts and literature.

Reigakushosu is an art, but not a main focus of Buntoku (a virtue of literature). Gi is a virtue of Bu and a basic of martial arts. Kyubaheiho (the strategies of archery, horse riding, and fighting) is an art, but not a main focus of Butoku. The real Bunbu is to unify Bun and Bu. This is completed by combining a virtue and art after learning a basic virtue first and mastering the art as next. If Bunbu were regarded as Jingi (justice and humanity) by using Confucianism idea, the essential quality of Bun would be Jin. Bun is what makes people feel pity. On the other hand, Bu is used as the violence, which prevents the influence of Bun. Since Bu beats enemies and suppresses the wars, it is also considered as Gi. Bun is a virtue. An example of Bun is obeying Koteichushin (being good to one's parents, brothers, and sisters) or keeping a harmony by loving others. Bu is a virtue such as obeying a morality and keeping a harmony by admonishing others. The basic idea of Bunbushiso is to clarify the virtue and pursue "completion of human being" by mastering the virtue. Moreover, it is to make a peaceful society by governing the people and the whole country using the virtue of Bunbu.

IV. An Ideal of Judo and Human Formation

Judo was originally developed from Jujutsu training. It became popular during the feudal age in Japan. Today, the purpose of Judo is not only physical training, but also the mastery of the basic principle in Judo and an application of the principle to a whole aspect of life in the society.

The basic principle in Judo is "to effectively operate the spiritual and physical power all the time to achieve the goal. The effectively usage of the

mind and body is a principle and discipline, and should be consistent in any kinds of situation of Kougekibogyo (attacking and defending) in Judo. In other words, it is the best application for energy (6).” This discipline is the most important in the Judo training. It is also a necessary discipline to achieve the goals in the all aspects of life. Seiryokusaizenkatsuyo means “to effectively use the power of mind and body by aiming at doing goodness.

A goal of Seiryokusaizenkatsuyo is performing goodness. To reach the goal, the power of mind and body has to be always effectively used based on a human morality. This is the only guidance to follow in order to progress, improve, and develop things, and achieve goal (7).” Seiryokusaizenkatsuyo is the most important general principle in human progress, social development, and goal achievement. After successfully living by the Seiryokusaizenkatsuyo, a person is then valued as a human being. Applying this principle into a society leads to unification and cooperation of the society.

It is important to help and compromise with each other instead of seeking personal benefit and neglecting others. Seiryokuzenyo (the best usage of energy) should be practiced in a society based on the concept of mutual prosperity. “As long as one is living in society and is trying to earn his/her own prosperity, the person will have conflicts with others who are also making efforts to prosper. In this situation, when two people insist on pursuing their own benefit, neither would end up benefiting. As a result, people should avoid any conflicts and try to cooperate with others for better outcome for each other. This cooperation cannot be achieved without understanding the concept of mutual prosperity (8)”. This concept is a basic principle of the both morality and the consistent development of society.

The complicated problems have always existed in human relationships, but one could be harmonious by using the virtues of politeness and loyalty and cooperating with each other and adjusting these complicities. Behind this virtue, there is also another principle called mutual prosperity. This mutual prosperity enhances not only individual power, but also national power with happy and healthy development of society. When this concept is applied to national relationships, it would help to bring peace between countries and contribute to the human progression. In addition, when it is applied to the

problems of thought, the many confused thoughts in this world could be appropriately guided. The society would love such an individual who performs this mutual prosperity, and other countries would trust the country that performs it. Therefore, Judo Training should be applied to the many things in life, not just practice in the Dojo. Applying Judo training principles will increase individual/national development, world peace, and human welfare. “Seiryokuzenyo and mutual prosperity” as the idea of Judo is to learn the logic of governing countries through the human formation and to contribute to a world peace.

V. Conclusion

Bunbu shiso has been an educational idea since the Edo period in Japan. The Bunbushiso is to clarify the virtue of Bunbu. It is because no matter how well Reigakushosu is done, it would not be useful in literature if a basic virtue were not mastered. It is as if trees without roots never bear any fruits. At the same time, no matter how well Shagyohaiho is performed, it would not be useful in Bujutsu if Butoku were not mastered. These virtues are based on Jin and Gi. Learning these Jin and Gi and combining Bun and Bu are regarded as an ideal of education. In other words, a spiritual training such as learning Bujutsu and a virtue of Jin and Gi are useful for a human formation.

On the other hand, Jigoro Kano fully realized a necessity of “combining literature and Bujutsu” under the social background of European influences in the Meiji period. He retained the Samurai aspects, which were necessary to preserve Japanese traditions and national spirit such as loving the issues of own country, valuing justice, and being polite and friendly to each other. He established Judo as physical education and human formation by removing the dangerous aspects of Bujutsu. He newly systematized Judo techniques, developed a theory called “Junoseigo” (a reasoning of Jujutsu in an area of thought). He also established a guiding principle, so-called “Seiryokuzenyo and Jitakyoei”. Therefore, Bunbushiso as an ideal of education in Japan and “Seiryokuzenyo and Jitakyoei” as an ideal of Judo mean contributing to rule

the country and bringing world peace through the human formation.

Portions of this paper were presented at the 2000 Seoul International Judo Scientific Congress. (November 30, 2000, Olympic Parktel, Seoul, Korea)

柔道修業と文武思想に関する一考察

中島 豺* 村上 繁** 金 官紘***

(*国士舘大学 **東海大学 ***龍仁大学)

I. 目 的

柔道が国際スポーツとしての地位を築くことができたのは、「道」としての柔道といった観念から一步ゆずり、競技ルール化を断行した結果からであるといわれる。

一方において競技スポーツとしての柔道と共に柔道が世界の人々に取り組まれるようになったのは、柔道のもつ「精神性」にあったといえる。

つまり柔道が人間にとって今日の社会において価値を問うならば、それは人間形成に大きな役割を果たし得ることができるからであると考えられる。

日本において文武両道の教養が必要であり、人間完成のためにこの両道の完備こそ教育の要諦であるということは、江戸時代から現代に至るまで一貫して説かれてきている。

この文武両道の教養を身につけ治国の理を学び世界平和に寄与することが、柔道の理念でもあるといえる。

そこで今回は柔道修業と人間完成としての文武思想に視点を当てて考察するものである。

II. 文武の本質

文武には徳と芸との本末があって、仁は文の徳であって文芸の根本となる。礼楽書数は芸であり文徳の枝葉である。義は武の徳であって武芸の根本である。射御兵法などは芸であって武徳の枝葉である。

根本の徳を学んで、枝葉の芸は次に修練し、徳と芸が兼ね備わって文武合一となる

ことが真実の文武である。

ここに文武の本質について結論を導き出してみると、文武とは世を治めるための道であるといえよう。文をもって人を愛し、物をあわれむことを文徳といい、武があって善悪を知り、人倫を正すことを武徳という。この文武の徳なくして身を修め人を治めることはできないのである。

この本の一部は、2000 Seoul International Judo Scientific congress・2000年11月30日 Olympic Parktel, Seoul, Korea で発表した。